

教学IRを活用した教育(授業)改善の事例紹介

2024年 9月 1日

帝京大学
高等教育開発センター教学IR推進室

本資料について

教学IRを活用した授業レベルの改善の事例を紹介

本資料は、帝京大学高等教育開発センターが提供するブラッシュアップ研修「データによる授業改善のすすめ：大学における教育の質保証とIR」（2023年度）の中で紹介した教育改善の事例です。IR（Institutional Research）活動をきっかけとした教育改善のための視点や検証の方法として、ご参考になれば幸いです。

高等教育開発センターでは、すべての教職員を対象としたブラッシュアップ研修を提供しております。上記のテーマを含めて、【学外公開】としている講座については、学外の教職員の皆さまにも公開しておりますので、お申込みをお待ちしております。

本資料について

概要と目次

- 概要

ある年度に授業評価アンケートの結果を活用して明らかになった課題とその解決のための授業改善、また、翌年度の授業実践の結果である学生の成績と総合満足度に関するデータを活用した検証の事例を紹介する。

- 目次

対象とした科目について

ある年度の成績や授業評価アンケートの結果

データから考えられた授業の課題

目標・指導（方法）・評価の観点で授業を捉えなおす

改善活動の結果を確認する

授業改善のためのデータ活用

対象の授業と到達目標

- 初年次教育科目「フレッシュマンセミナー」
理工学部1年生全員が受講する（必修科目ではない）
- 到達目標
 - ① 学生は、学問の学び方を実感し、知的好奇心を高めることができる
 - ② 学生は、自律的に学ぶための根本スキルを身につけ、活用することができる
 - ③ 学生は、自らの大学生活における時間管理をもとに、学習環境の基盤を整えることができる
 - ④ 学生は、必要なコミュニケーションをとることができ、他者と協力して問題解決に取り組むことができる

授業改善のためのデータ活用

現状をデータで確認する(最終成績の分布)

- ある年度の最終成績の分布 (履修者数は230~260名の範囲)

評価	S (90点以上)	A (80点台)	B (70点台)	C (60点台)	D (不可) (60点未満)
割合	11.9%	24.2%	63.9%		

授業改善のためのデータ活用

現状をデータで確認する(アンケート各項目は5点満点)

カテゴリ	設問内容	平均
教員の対応	1.この授業、シラバスにそって行われましたか	4.25
	2.教員の話し方は、聞きとりやすかったですか	4.04
	3.教員は、わかりやすく教えようと工夫していましたか	4.02
	4.教員は、学生の質問や意見に適切に対応していましたか	3.99
学生としての取り組み	5.この授業にどれくらい準備が必要でしたか	3.90
	6.毎回の授業の事前・事後学修に取り組む時間は平均してどの程度ですか	3.48
	7.あなたは、この授業の到達目標を知っていますか	3.55
	8.この授業の到達目標は達成できましたか	3.66
全体の満足度	9.あなたは、総合的に見て、この授業に満足していますか	3.44

授業改善のためのデータ活用

現状をデータで確認する(アンケート各項目は5点満点)

カテゴリ	設問内容	平均
教員の対応	1.この授業、シラバスにそって行われましたか	4.25
	2.教員の話し方は、聞きとりやすかったですか	4.04
	3.教員は、わかりやすく教えようと工夫していましたか	4.02
	4.教員は、学生の質問や意見に適切に対応していましたか	3.99
学生としての取り組み	5.この授業にどれくらい準備が必要でしたか	3.90
	6.毎回の授業の事前・事後学修に取り組む時間は平均してどの程度ですか	3.48
	7.あなたは、この授業の到達目標を知っていますか	3.55
	8.この授業の到達目標は達成できましたか	3.66
全体の満足度	9.あなたは、総合的に見て、この授業に満足していますか	3.44

全体平均（約4.00）と
比較してやや低い

授業改善のためのデータ活用

現状をデータで確認する(アンケートの自由記述回答)

- グループワークに関して、自分からメンバーに連絡を取ったり、意見を出したりすることができたというポジティブな記述も見られた反面、以下のようなネガティブな内容も見られた
 - ✓ グループワークで協力してくれない人がいた
 - ✓ 成果物の作成過程で作業量に偏りのあるグループがあった
 - ✓ 偏りがあったのに、あまり協力しなかった学生も同じ評価となることには納得がいかない

授業改善のためのデータ活用

現状をデータで確認する(アンケートの自由記述回答)

- グループワークに関して、自分から意見を言ったりすることができたという声も多かった反面、以下のようなネガティブな声も見られた

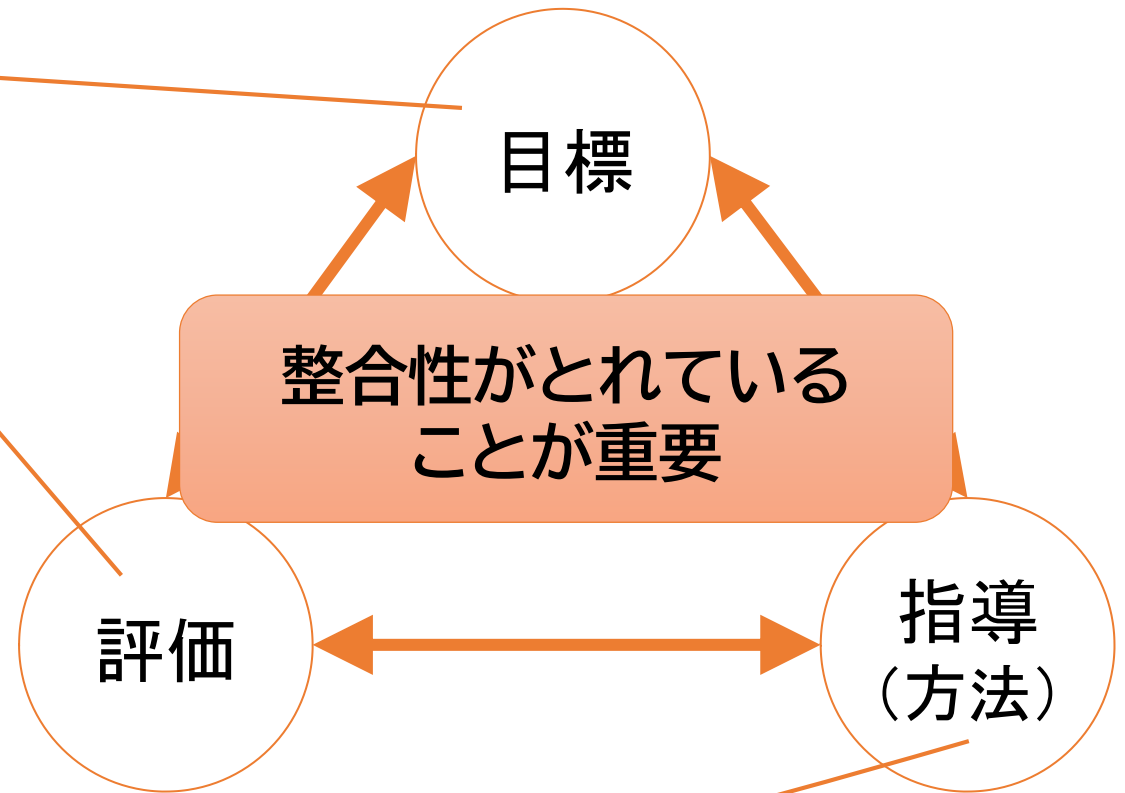
「他者と協力すること」を評価できていない？

- ✓ グループワークで協力してくれない人がいた
- ✓ 成果物の作成過程で作業量に偏りのあるグループがあった
- ✓ 偏りがあったのに、あまり協力しなかった学生も同じ評価となることには納得がいかない

授業改善のためのデータ活用

授業づくりに重要なメーカーの3つの質問で確認する

- ①「どこへ行くのか？」
- ②「たどり着いたことをどうやって知るのか？」
- ③「どうやってそこへ行くのか？」



授業改善のためのデータ活用

前年度のグループワークの目標・指導・評価

- 目標
学生は、必要なコミュニケーションを取ることができ、また、他者と協力して問題解決に取り組むことができる。
(汎用的技能)
- 指導（方法）
調査研究のためのグループワークを実施
- 評価
調査研究の発表資料を評価

授業改善のためのデータ活用

前年度のグループワークの目標・指導・評価

- 目標
学生は、必要なコミュニケーションを取ることができ、また、他者と協力して問題解決に取り組むことができる。
(汎用的技能)
- 指導（方法）
調査研究のためのグループワークを実施
- 評価
調査研究の発表資料を評価

成果物の評価であり、
他者と協力する
取り組みの評価
ではない

授業改善のためのデータ活用

翌年度のグループワークの目標・指導・評価

- 目標
学生は、必要なコミュニケーションを取ることができ、また、他者と協力して問題解決に取り組むことができる。
(汎用的技能)
- 指導（方法）
グループワークを効果的に進める方法に関する授業回
グループ内で負担が偏りにくいグループワーク
- 評価
グループワークに関するリアクションペーパー
個人がグループのために実施した調査内容

授業改善のためのデータ活用

変更点と効果確認のためのデータ

- 翌年度の変更点
 - グループワークを円滑に行うための意識や方法を学ぶ回を設けた。
 - グループワークの課題の難易度を下げ、評価も個人ベースで行うこととした。
- 効果を確認したデータ
 - 成績評価
 - 授業評価アンケート

授業改善のためのデータ活用

変更の影響をデータで確認する(最終成績の分布)

- 最終成績の分布 (履修者数はどちらの年度も230~260名の範囲)

評価	S (90点以上)	A (80点台)	B (70点台)	C (60点台)	D (不可) (60点未満)
割合	11.9%	24.2%	63.9%		



評価	S	A	B	C	D
割合	12.2%	32.9%	54.8%		

※ 修得率に大きな変化はなし

授業改善のためのデータ活用

変更の影響をデータで確認する(アンケート各項目は5点満点)

カテゴリ	設問内容	前年度平均	翌年度平均
教員の対応	1.この授業、シラバスにそって行われましたか	4.25	4.48
	2.教員の話し方は、聞きとりやすかったですか	4.04	4.33
	3.教員は、わかりやすく教えようと工夫していましたか	4.02	4.22
	4.教員は、学生の質問や意見に適切に対応していましたか	3.99	4.22
学生としての 取り組み	5.この授業にどれくらい準備が必要でしたか	3.90	3.24
	6.毎回の授業の事前・事後学修に取り組む時間は平均してどの程度ですか	3.48	2.90
	7.あなたは、この授業の到達目標を知っていますか	3.55	3.80
	8.この授業の到達目標は達成できましたか	3.66	3.85
全体の満足度	9.あなたは、総合的に見て、この授業に満足していますか	3.44	3.91

授業改善のためのデータ活用

変更の影響をデータで確認する(アンケートの自由記述回答)

- グループワークについて、以下のようなコメントが見られたが、グループワーク評価に関する不満は皆無になった。
 - ✓ グループワークでは何が重要なのかわかりやすかった。
 - ✓ 初対面の人とも積極的に意見を言うことができるようになった。
 - ✓ グループワークに積極的ではない人がいたときには、不快に感じた。

授業レベルの内部質保証に向けて 変更の結果

- 改善のポイント
 - ✓ 目標・指導・評価の整合性が高まった。
 - ✓ 教員の対応や到達目標、全体的な満足度が向上した。
 - ✓ グループワークの評価に関する不満が減少した。
- 発生した課題
 - ✓ 全体的に成績評価が前年度に比較して高くなった。
 - ✓ 準備の必要性和授業外学習時間の評価が下がった。
 - ⇒ もう少し難しい課題を設定できる

まとめ

経験や勘だけではなく、データで裏付けを取って改善する

- 大学では、大学レベル、学位プログラムレベル、授業レベルで教育の質を保証するために、データが活用されている。
- 教育活動においては、全てがデータになりうる。
- 量的、質的なデータの両方の特性を踏まえて、分析する。
- 目標、指導、評価の整合性を高め、教育の質を向上させる。